

折節の記 2007年10月11日

り方に義憤を感じた青年将校が政府要人を襲来し、時の高橋蔵相らを殺害した。押入にかくれて難を免れた岡田敬介総理は清子刀自の叔父であり、その身代りに反乱軍に殺された松尾伝蔵大佐は父だった。清子刀自の気持ちに付度すると胸つままる。温泉場への旅にお供した時、筆者がご夫妻結婚の経緯をお尋ねした。清子刀自は待っていましたとばかりに膝を乗り出し、ご主人を指差しながら「私はこの人の母と結婚したのです」と。その時、天下の龍三氏は笑みを浮かべて、何の反論がなかったことが昨日のように思い出される。父伝蔵氏と刀自は上野から、瀬島さんの富山の実家を訪れた。六時間以上かかったそう。その時、龍三氏の母堂は病床にあり、「私の生きていく間に、ぜひ龍三の嫁になってほしい」と頼まれたそう。暫くして世紀のご夫婦は誕生した。

朝日社説の虚妄と歴史の真実

中嶋嶺雄
(国際教養大学理事長・学長)

去る二〇〇七(平成十九)年七月七日、盧溝橋事件七十周年というこゝとで、『朝日新聞』は「盧溝橋事件70年 もう一步、踏み出す勇気を」と題する社説を掲げていた。この社説は通常のほぼ二倍の長さの特別版であり、『朝日新聞』が盧溝橋事件を題材にして、日中関係、特にその歴史認識のズレにたいし国民を啓発し、朝日新聞社の立場を明らかにするという気負いの感じられる文章であった。しかし、そこには二つ、歴史の真実と決定的に、しかもまったく自明の事柄として違っている点があることを指摘しないわけにはゆかない。そのために、折角の社説が意味をも

心の洗われるような話だった。しかしご夫妻の運命は、日本国の命運に流される。大本営参謀として活躍されていたご主人は関東軍参謀に転属を命ぜられた。ソ連参戦の懸念から関東軍参謀であられた竹田宮恒徳殿下のいわば身代りとして派遣された。そして十一年間の抑留生活を余儀なくされたのである。それ故、戦後臣籍降下を命ぜられた竹田氏が龍三さん帰国のおり舞鶴まで迎えに行かれ、竹田氏の葬儀委員長を瀬島さんがお務めになったのはその運命的なご縁による。瀬島さんが東京軍法廷に証人としてシベリアから出席しながら、再送還された現実。その間、食べる物、着る物すら事欠きながらお嬢さんお二人を育てられた清子刀自の生きざま。苛酷な日々であられたと思う。ご葬儀の後、孫の興石泰宏君から手紙が届いた。清子刀自のご一生を如実

たなくなってしまうばかりか、『朝日新聞』の「記録」としても大きな禍根を残すものになってしまった、と私は思う。まず第一点は、この箇所である。『七七事変』。盧溝橋事件を中国ではこう呼ぶ。満州事変が起きた9月18日と並んで、7月7日は民族屈辱の日として記憶されている。その後、45年まで続く悲惨な日中戦争の起点との認識だ。いまでも多くの日本人が戦争を振り返る時、思い浮かべるのは真珠湾攻撃の12月8日であり、敗戦の8月15日だろう。中国人にとって今日という日は、それに匹敵する記憶を呼び起こす。七夕を祝う日本とは大違いだ。社説は、太平洋戦争開戦の十二月八日や敗戦の八月十五日を、盧溝橋事件が起こった七月七日と比較しているのだから、この歴史体験

に語られているのでお許しを得てお伝えしよう。「私自身突然の訃報を聞きとて驚きましたと同時に涙が止まりませんでした。私の家内の遺産をおばあちゃんが心待ちし、よく家内のお腹をさすってもらいました。ご承知の通り、おばあちゃんの家(松尾伝蔵)は二・二六事件で総理官邸にて岡田敬介(祖母の叔父)の身代りで殉職し、又祖父(龍三)がシベリアに十一年間抑留され、娘二人を六畳一間で育てながら工場や、靴磨きまでして働き、家庭を支え、戦前、戦中、戦後を、とても苦勞された方でした。おじいちゃんがおばあちゃんに頭が上がりなかつたのはこの辺にあるのかもしれませんが。棺が自宅から運ばれる時、おじいちゃんが大声をあげて泣いていたのが印象深く残っています」涙を滂沱と流して読みながら、清子刀自のご冥福を祈った。合掌。

を比較するのは決定的に間違っている。私自身は昭和十一年生まれで、いわば「黒塗りの世代」の戦後派に属するけれど、子供心にも十二月八日の緊迫感や憶えており、ましてや国民学校三年生の夏の八月十五日は玉音放送を聴いて泣いた記憶がある。こうして十二月八日も八月十五日も日本人にとっては国民総動員体制下の全国的体験なのであった。これに比して、当時の中国で盧溝橋事件の発生を知っていた中国人はどれほど存在したであろうか。ごく少数だったはずであり、七月七日が「民族屈辱の日」として記憶されたいのは、まさに中国側、とくに中国共産党による「教化」と「反日教育」によるものである。朝日社説は、続けて「その日に、私たちがこの社説を掲げるのは、この一年が日中両国にとって特別の意味を持つと考えたからだ。盧溝橋事

件から70年、そして12月の南京大虐殺からも70年」と述べている。

「南京大虐殺」については、私自身昨年春、「南京大虐殺記念館」を訪れており、当時私を案内してくれた南京大学の中国人の学究は、「300000」と石に刻まれた犠牲者の数字を見て、「何の実証もなくこの数字を刻んだことを中国側は将来困ることになるでしょう」と語っていたことを指摘するにここではとめておく。

しかし第二点として指摘しなければならぬ大きな問題は、盧溝橋事件といい南京事件といい、その当時の中国とは国民党の中国、つまり蒋介石指導下の中華民国であるにもかかわらず、こんな明白な歴史的事実をまったく指摘していないばかりか、この長い社説には中華民国ないし国民党政府（南京政府）という固有名詞が一度も出てこないことであ

る。このような歴史の明白な真実を避けていては、いかなる高邁な論説も説得力をもたない。

『朝日新聞』が盧溝橋事件を語るに際しては、一九三七（昭和十二）年当時の『朝日新聞』を復刻版で参照するのがもっとも手取り早いのだが、この記念碑的な社説の執筆に際し、筆者はどのような初歩的な作業を行ったのであろうか。

たまたまこの社説が出た直後に所用で『朝日新聞』の中堅幹部と会う機会があったので、この社説についての私の所見を申し述べたところ、同氏も私と同じ感想を抱いたところとであった。『朝日新聞』の良識に期待したい。

小さな啓示

みずなし
水梨 和恵
(エッセイスト)

と受け止めて、なんとか受け止めた方がいいが、一瞬うっ、と固まるしかないことがある。

四歳になったばかりの息子の場合。一ヶ月ほど前のある朝、保育園に送ろうと二人で玄関を出た。息子は周囲をすうつと眺め渡してから、突然私を見上げ、こう言った。

「——ねえ、ここは宇宙？」

顔つきも至極真剣に、私に確認するのだ。ここは、宇宙？

一瞬でノックアウトだ。

聞かれた瞬間、見慣れた近所の風景が遠のき、暗い宇宙空間の遙かな星の瞬きの中に、息子と二人で立っている幻像がありありと浮かんだ。確かにここは宇宙だ。宇宙に浮かぶ地球という星の、日本という島国の、さらにその一面にすぎない東京という都市の、ほんの隅っこに立っている私たち。

「そうだね、ここは宇宙だよ。宇宙

の中の、地球という星にいるんだよ」

と説明しつつ、日常の中でまったく想起することのない距離を、不意打ちで感じさせられたことに軽い眩暈にも似た感覚を覚える。そういえば、チャールズとレイ・イームズが作った短編映像の中に、まったく同じ狙いのものがあつた。公園でピクニックを楽しむ男女、それを鳥瞰するカメラは、驚くべきスピードで上昇していく。次第に浮かび上がる青い地球、さらに太陽系を脱出し、銀河系が他の星系にまぎれ、白いぼんやりとした輝きでしかなくなる。と、また急速に下降していくカメラ。地球に近づき、大気圏に突入り、そして地上の男女へとピタリと戻ってくる。さらにズームして、ついに細胞の分子構造まで。見る人は、まるで神の目を持ったごとく、数分の間にとつともない距離を旅す

「なんで？なんで？」「なに？なに？」の質問攻めはこどもの特権だ。息子が片言で話し始めた頃から、そんなやり取りを交わす日を楽しみにしていた。何を教えて、何を考えさせようか。私の何気ない一言がきっかけで、何かにすぐ興味を持って、そのうち息子の思わぬ才能が開花することだってあるかもしれない。……とんだ親馬鹿と言うしかないが、心楽しくいろいろ想像して、シミュレーションしてみたりもした。「なんでお空は青いの？」（これはこども質問の定番ですね）なんて聞かれたら、私ならこう答えよう、とか。

しかし、大人の想像をポンと飛び越えて、言ってみれば直球、カーブの違いではなく、むしろ異次元のマウンドからまっすぐストロークを投げてくるのが、こども、というものなのです。大人はミットでずしん

ることになる。あの不可思議な感覚（POWERS OF TEN、1977年）。今もなお新鮮で、かつどこか懐かしい家具の数々を生み出したイームズ夫妻は、その優れたデザイン感覚で、ごく普通の日常生活の中に非日常の美や驚き、喜びを持ち込んだのだった。いや、むしろ発見したというべきか。

——思い巡らす私をおいて、うん、ここは宇宙だよねとうなずいて、息子は納得した様子で歩き出す。どこで「宇宙」という単語を覚えたのかは不明だが、息子は、自分が「ここにいる」ということを、どのように理解しているのだろうか。彼の頭の中に広がっている、「宇宙」をのぞいてみたくなる。きっと奇妙で魅力的な気がする。例えば神話のように、古代の人々の世界観のように。

「自分の存在について考える」こと